

泌 尿 器 科 紀 要

第 9 卷 第 11 号

昭和 38 年 11 月

随 想

レブランドサナトリウムの思い出

虎の門病院泌尿器科医長 齋 藤 豊 一

本年 4 月の日本医学会総会に来朝され、特別講演をされた Ljunggren 教授はスウェーデンの Göteborg (イェーテボリと発音する) 大学の教授であることは申し上げるまでもあるまい。一昨年 Rio de Janeiro でおこなわれた国際泌尿器科学会に出席することが出来た時に帰国の途中でヨーロッパを歩いたさいにこの大学をおとずれた。その時教授室で10分程お話をうけたまわることが出来、論文の別刷を頂いたり、大学の沿革史を書いた 100 頁程のパンフレット等を頂いた僕にとっては連絡もなしにおとずれたにもかかわらず、面会することが出来て光栄であつた。

この大学には附属の施設として郊外の Rävulanda という所に泌尿器結核専門のサナトリウムがある。ストックホルムで開催された前々回の国際泌尿器科学会に出席された大越先生から、ここは一見する価値があると教えて頂いてあつたので、このサナトリウムの院長であり、Ljunggren 教授の助教授である Ola Obrant 博士への紹介状を頂いて見学に訪問した。

8 月 15 日終戦記念日の日にドジャぶりのロンドンをたつて、オスロ行の飛行機で午後 4 時頃 Göteborg の飛行場についた。ロンドンと違って晴天であり、空はぬけるように青かつた。小さな空港である。形ばかりの税関の検閲があり、バスで市内のターミナルにゆき、タクシーのりかえて Park Avenue Hotel についてほつとした。落着くと間もなく電話がなつて、Hrynchrist という医師からのものであり、Obrant 助教授の命で、明日 9 時に迎えにゆくから、ホテルの前でまっついていることであつた。其夜はホテルの食堂で夕食後地図を片手に町の目抜き通りを散歩した。人口 50 万足らずの都会で、港の一部は活気があるが、静かな町であつた。街路樹が太くて、数が多いのが印象的であつた。途中で日本人にすれ違つて目礼したが、こんな所であえるとは一寸意外だつた。北欧の夏の夜は暮れにくく、10 時すぎても青夜という感じであつた。(白夜というのに比べて青いと感じた。)

翌朝正確に 9 時に Hrynchrist 氏が車をかつて迎えに来てくれた。30 そこそこの若い医師であつた。彼の案内で新装なつた Sahlgrenska 病院を隅から隅まで見学することが出来た。設備は素晴らしいの一語につきるし、欧米の病院の紹介記事はどこの本にでもものつているので書くとは思わないが、興味のあつたことは医学博物館というような室があつたことで、この病院の歴史を中心にして、スウェーデン医学の発達を絵画、写真はもとより、当時の遺物を中心として陳列してあつた。

屋上からは病院の大部分が見渡せる。あれが薬理、あれが解剖、あれが看護婦宿舎と Hrynchrist 氏は指をさして教えてくれる。針葉樹の森に囲まれて美しい白い建物が点在している。その中には 1 時間位前に廻つた所もある。2、3 年後にはこわして新しいビルにするのだという。見た範囲ではいたんでいる様子もなし、何故そんなことをするのだろうと思つたので Why must they be rebuild ? とたづねたところ、こともなげに They become

too old. と答えたにはおそれ入った。Too old というだけで立派な建物をこわして最新式のものにすることが出来る国力はたいしたものであろう。東大泌尿器科の医局、研究室の如きはどうなるのだろうか、この人達とは住む次元すら違うのかとさえ思われた。

次に感心したことは手術室の婦長に紹介された時であつた。履歴書のような書類を見乍ら、自分の手帳に盛んにメモをとっている。何をしているのかとたづねたら「私は交代で数日前に分院の方からここに来た。従つてこの医師、看護婦の名と顔とをよく知らない。手術室は各科の人が集る所だから、早く憶えないと私の Duty がつとまらないからだ」という。Duty であるという考え方が気に入つたのでよい事だと返事した所、当たり前というような顔で「手術を早く確実に出来るように arrange することが婦長の Duty であり、Study ではないか」と反問して来た。

Rävulanda は自動車で、1 時間程かかる数十哩はなれた所にある寒村で、サナトリウムは周囲の目のさめるような芝と白樺に囲まれた西洋のカレンダーにでも出て来るお伽の国のような環境にある白い木造の質素な三階建の病院である。相憎雨がよつて来て写真をとることが出来なかつたのは残念である。

常には医師がいないので、週に 2 回 Obrant 助教授が廻診し、其他に 2 回位 Hryncrist 医師が廻診するという。其他は看護婦、栄養士等が同じ建物の中に住んでいて勤務しているとの事であつた。訪問者名簿の中に土屋、重松、大越、楠等の名前を見出した時は訳もなく嬉しかつた。この先生達が訪ねてくれた当時は 80 の病床が泌尿器結核の患者のみでしめられていたが、化学療法の発達のおかげで患者は激減し、泌尿器科以外の癌、ロイマの人達も大分入っているし、それでも空床があり、泌尿器科専門医の Dr. には気の毒だといつていた。

廻診は始め診察室で行われ、患者が次々と来て前に坐る。医師、看護婦、患者、助教授と一問一答は型の如きもので、スウェーデン語だからさっぱり判らぬ。泌尿器科のものについては英語で説明してくれる。それから病室を廻る。夕方になつていたので、8 月とはいえ北欧は冷える。患者は毛糸のものを着ており、若い人はなく、何れも老人である。孤独な老人という気の毒な感じが先にたつた。完全なる社会保障という。しかしそれあるが故に子、孫達は安心しきつて、この孤独な老人達の面倒を見ないのであろうか。60 人余りの患者に面会人が 1 人も来ていない。

日本のように面会人が時間かまわずに来るのには大反対の僕も疑問になつて、何故面会人がいないのかと助教授に質問して見たが僕の英語では真意が通じなかつたのだろう。入院しているのだから家族とあえなくても仕方ないといつたきりであつた。家族は入院している身内の者のことが気にならぬのか、それとも闘病のためとしてじつと我慢しているのか、その辺の家庭の細い感情のことを知りたかつたのであるが、僕の貧弱な英語の力では如何とも出来なかつた。

病気のことについては、日本のどこの泌尿器科の結核病棟と同じで申上げるまでもない。Scheele の手術後のもの等もあり、一方の尿管の下端に狭窄の来たものに尿管尿管吻合術をおこなつた者がいて、珍らしいであろうといわれたので、日本でもすでに土屋博士が成功していると返事した所、一瞬土屋先生の顔を思い出そうとしたのであろう天井の一角を伺つた青い眼が印象的であつた。

廻診後英国から給食の勉強に来ているという栄養士を混えて職員一同と質素ではあるが、栄養、ボリュームの満点な食事を頂き、そこを辞したのは 7 時を過ぎていた。